

# インタープリベントのScience & Technology Advisory Board

うちだ たろう  
内田 太郎

筑波大学 生命環境系 教授



インタープリベントはオーストリアで多発した土砂災害等を議論するため、1967年に自然災害防止に関する種々の領域の研究者及び技術者が集まり討議したことから始まった国際的な組織です。通常の国際学会とは異なり、いわゆる学術的な研究のみならず、行政的な取組み、実務的な技術開発などについても議論がされています。様々な災害の中でも、特に、土石流、いまでいう土砂・洪水氾濫、流木、地すべり、落石、雪崩などの災害が主な対象となっています。近年は、山火事などの気候変動にともなう災害についても注目されています。このテーマの並びからお分かりいただけるよう「砂防・地すべり」に関する分野がほぼ網羅されています。

日本は1992年からインタープリベントの正式メンバーになっています。2000年以降は、4年に1度、インタープリベント本部のシンポジウムが欧州で開催され、その中間年に環太平洋インタープリベントのシンポジウムが4年ごとに開催されています。そしてインタープリベント本部のシンポジウムと併せて、行政官会議が開かれています。日本でも、環太平洋インタープリベントのシンポジウムが2002年の松本市での開催以降、4回（2006年新潟、2014年奈良、2018年富山）開催されています。環太平洋インタープリベントのシンポジウムは日本以外ではこれまで台湾でも開かれています。前回の欧州の会議は2024年6月にオーストリアのウィーンで開催され、世界の25の国と地域から500人以上の行政官、研究者、技術者が参加しました。次回は、環太平洋インタープリベントのシンポジウムが2026年10月に札幌で開催予定です。さらに、その次には欧州の会議が2028年にノルウェーで開催される予定です。

インタープリベントの科学技術委員会（Science & Technology Advisory Board、以下、「STAB」と呼びます）は、主に欧州で4年に1度開催される会議の学術的・技術的な検討・準備を担っています。環太平洋インタープリベントのシンポジウムは別途委員会が組織され、

実施されています。インタープリベントの組織全体の運営に関しては総会、理事会があり、予算の管理、各種の取組みなどが進められています。理事会は年に2回程度開かれ、現在は国際砂防協会 岡本敦理事（アジア航測株式会社）が副会長として、参加されています。筆者も今年度から理事になっております。総会、理事会では、最近若手も含めた人的なネットワークの構築がホットなテーマとなっています。これについては、まだ、「形」がはっきりしているとは言い難いですが、日本からの積極的な参加が望まれています。

STABのメンバーは、インタープリベントの会員になっている国を中心に、次回の開催国のメンバーが多めに参加しています。筆者は2021年から、北海道大学の山田孝先生のあとを引き継いで、STABに参加しています。4年に1度のヨーロッパでの会議が終了するとメンバーの入れ替えが行われます。2024年のウィーンでの会議後、メンバーの入れ替えがありました。日本からは従来1名の参加でしたが、今期より1名増員の提案が受け入れられ、京都大学の宮田秀介先生にもSTABのメンバーとして加わっていただいています。2025年現在、メンバーは24名で、国別にはオーストリア6名、スイス4名、イタリア2名、ドイツ2名、スロベニア1名、フランス2名、ノルウェー4名、日本2名、台湾1名となっています。議長はオーストリアのグラーツ工科大学のJosef Schneider氏が務めています。

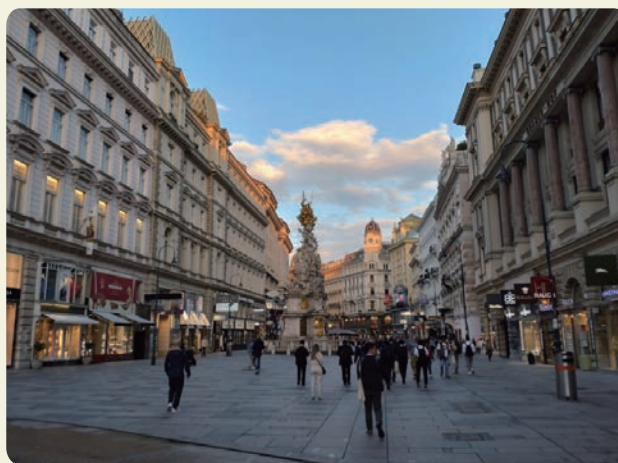
ミーティングは対面やオンラインで開かれ、次回の会議に向けての議論がされます。具体的には、全体テーマの設定がまず議論されました。2024年のテーマは“Natural hazards in a changing climate - How to manage risks under global warming?”でした。直訳すると、「気候変動下における自然災害：地球温暖化が進行する中、いかにしてリスク管理をするか？」ということになるかと思えます。このテーマを決めるのにもかなり多岐にわたる長時間の議論がSTABのミーティングで

行われました。その上で、サブテーマが設定され、基調講演者やパネルディスカッションのテーマなどが徐々に決められていきました。その後、論文が投稿されると、STABのメンバーで論文の編集・査読を担当していきます。さらに、会議の前日は会場の下見などを行い、会議当日はメンバーの多くが座長を務めたりします（私は担当しませんでした）。さらに、会議の翌日と約半年後の2回にわたり会議の反省会が開かれ、次回の会議に向けての課題の整理等が行われました。STABでは大変熱心に様々な議論をしています。テーマ等のワーディング（言葉使い）1つにも、結構な時間が費やされることがあります。また、発表者の多様性（年齢、国、ジェンダー、所属など）にもすごく気を使い、発表者を決定しています。さらには、学生の表彰制度を作るなど新たな取り組みにも積極的に取り組んでいます。

ミーティングは基本的には、ヨーロッパで開かれます。会議の時間は半日から丸1日という感じです。参加メンバーでのディナーもあります。私は講義などの関係で現地での参加はあまりできていません。また、オンラインでの参加の場合も、日本時間の夜になったりするので十

分に議論に参加できていないこともしばしばあります。そもそも、英語の議論を長時間、集中して聞くのも厳しく、日本を代表して出席しておきながら、十分なプレゼンスを示せていないのが課題だと強く感じていました。そこで、（ひとえに私の力不足なのですが、）この問題を解消するために、今回、こちらからお願いして、日本の枠を広げてもらい、宮田先生に加わっていただきました。これにより、日本のプレゼンスも向上するかと思います。

繰り返しになりますが、2026年10月には札幌で環太平洋インタープリバントのシンポジウムが開かれます。秋の北海道は、欧州の皆さんにも魅力的な様で、STABの会議や総会で紹介すると、皆さんぜひ行きたいと口をそろえて言っていました。ぜひ、読者の皆さんも2026年の札幌や2028年のノルウェーの会議に参加していただければと思います。冒頭、述べましたように学術的な研究以外の発表も多くあり、「砂防学会」的な雰囲気もあり、参加しやすいのではと思います。国内の会議では見えない新しい世界があることが感じられると思います。



前回の会議が開かれたオーストリアのウィーンの様子



会議前日のSTABのミーティング後のディナー